

ハガキの中で言及のある『KOTONOHA』第59号は、吉池孝一(2007)「有坂秀世『音韻論』の増補版について」を指す。これは『音韻論』の七種の版本を比較し各本の誤記誤植を正したもの。このハガキは、『音韻論 増補版』の誤に対する下記の記述について、感想を寄せられたものである。

【記】

「4. 「例へば, Guten Morgen! (qu:tən mɔrgən) は [gumɔ̃n] 或は [gumɔ̃] と發音すれば充分分るし, . . .」(⑦復刊本 166 頁 2-3 行)

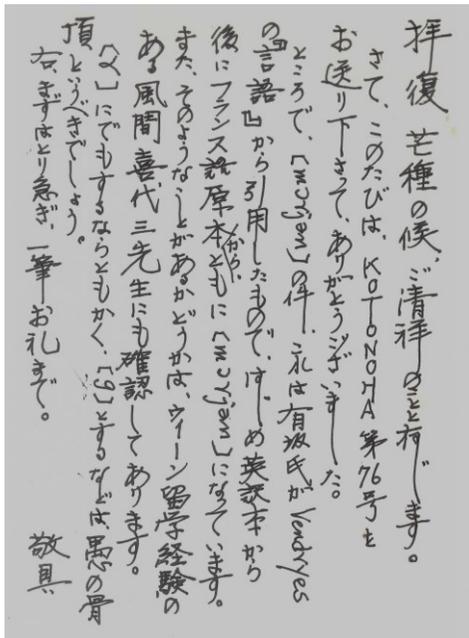
問題となる部分はドイツ語音韻表記の (mɔrgən) である。諸版本をみると、①②③④「(mɔrjən)」→⑤⑥⑦「(mɔrgən)」とある。Morgen の g に相当する音韻表記を前者は接近音 (j) とし、後者は破裂音 (g) とする。⑤「増補版」の編集者は意をもって破裂音 (g) に訂正したわけであるが、これはかえって有坂氏の意に反する。

確かに手書きの j と g は似ている。これによって誤植が誘発されたとみなしたのである。Guten Morgen の音韻表記を (qu:tən mɔrjən) のように接近音 (j) で表記することは昭和 15 年の『音韻論』が初出ではない。昭和 10 年の「有坂秀吉氏音韻論手簡」に二箇所 (qu:tən mɔrjən) とあり (有坂愛彦・慶谷壽信編 1989:297-320 の「有坂秀吉氏音韻論手簡」による。同 314 頁、316 頁参照。)、昭和 11 年の「音韻変變化について (三)」にも「例

へば、(gu:tən mɔ:ʃən)は〔gumɔ̃n〕或は〔gumɔ̃〕と発音すれば充分分るし、・・・」
とある（有坂秀世 1936:46-56 の p.55 による。なおここで挙げた例文のなかには、本論と関わらない部分であるが、明らかな誤記誤植が2カ所ある。煩瑣となるため明示せず正して提示した。）。このことからみて、接近音〔j〕をただちに誤植とするわけにはいかない。

この点につき、内藤好文 1966 によると（内藤好文 1966 の 69 頁による。なおこれは第3版であり、初版は 1958 年発行。）、北ドイツおよび中部ドイツで、語内の g[g]は[a][o][ɔ][ɔ][u]以外の音の次で [j]に発音されるという。例えば、Siege[zi:jə]、Berge[bɛrjə]、Metzger[mɛtsjɛ]など。このような発音は、昔は標準的と考えられ、今でも相当行われているけれども、学校教育によって[g]に置き換えられつつあるという。この記述によれば(mɔ:ʃən)という音韻をもったドイツ人がいてもなんら不思議ではない。(j)を誤記として処理してしまうわけにはいかないのである。これよりこの部分は、①②③④○「(mɔ:ʃən)」→⑤⑥⑦×「(mɔ:ʃən)」とする。」

2009. 6. 9 ハガキ 慶谷→吉池



ハガキの中で言及のある『KOTONOHA』第76号は、吉池孝一(2009)「有坂秀世氏の学位論文にみえる誤植等について」を指す。

このハガキは、吉池孝一(2009)の下記の記述に対するものである。

【記】

「増補版独自の誤植等の訂正もあり、それはそれで有益であるが、新たな訂正(変更)

によって、かえって有坂氏の意思に反する誤に陥ってしまった部分も幾つか見られるのは残念なことである。」この記述の注記として下記がある。

「一例を挙げる。ドイツ語 Morgen (朝) の音韻表記⟨mɔrjən⟩ (初版・第二版・第三版・戦後初版の 166 頁 2 行目) を⟨mɔrgən⟩ (増補版の 166 頁 2 行目) に訂正 (変更) している。前者は接近音⟨j⟩とし、後者は破裂音⟨g⟩とする。手書きの j と g は似ており、これによって誤植が誘発されたとみなし意をもって破裂音⟨g⟩に訂正したのであろうが、これはかえって有坂氏の意に反する。参考までに、内藤 1966 の述べるところを挙げると、北ドイツおよび中部ドイツで語内の g[g]は、[a][o][ɔ][ʊ][u]以外の音の次で [j]に発音されるという。例えば、Siede[zi:jə]、Berge[bɛrjə]、Metzger[mɛtsjɐ]など。このような発音は、昔は標準的と考えられ、今でも相当行われているけれども、学校教育によって[g]に置き換えられつつあるという。」

2009.6.9 のハガキは、2007.12.11 のハガキよりも明瞭に、⟨mɔrgən⟩が誤で、⟨mɔrjən⟩が正であることを述べる。有坂氏の⟨mɔrjən⟩には出典があり、Vendryes 著『言語』の [mɔrjən] であることを明らかにしており興味深い。